

明治期アカデミー哲学の系譜とハイデガーにおける形而上学の問題 ——如来蔵思想とユダヤ・ヘブライ的思惟との収斂点——

井上 克人

I 明治期アカデミー哲学の形成—「現象即実在論」

井上哲次郎や井上円了らに代表される明治期アカデミー哲学の特質が「現象即実在論」にあることは夙に知られている。現象の奥に真の「実在」、すなわち形而上学的絶対者を認め、しかも「実在」は現象の背後にあるのではなく、その只中に内在するという考えである。これは大乘仏教思想の根幹をなす「本体的一元論」、すなわち外に超越者を想定しない思考様式である。じつは、この発想の淵源は、『大乘起信論』のいわゆる「万法是真如真如是万法」という定式にある。東京大学で初めて開設され、原坦山が担当した「仏書講義」のテキストに選ばれたのが、この『起信論』であった。彼らはその本体的一元論に啓発され、西洋に対抗して日本独自の「哲学」を提唱しようと企図したのである。

ところで西洋における思考様式は、神と人間、近世以降では認識主観と客観的世界といった二項対立的な二元論をその特質としてもつ。それに対し、本体的一元論に立つ『起信論』は、自体清浄なる「心真如」が自らの清浄心を失うことなく心生滅へと転成していく「真如随縁」の発想をもつ。妄念にまみれた現象的世界は、一方では「真如」の本然性からの逸脱でありながら、同時にそれは「真如」そのものの自己展開に他ならず、真如と妄念とは「非一非異」の関係にあって、「現象」がそのまま「真実在」なのである。

敷衍して言えば、「真如」は、それ自身我々の思惟や言説を絶する〈空・無〉、すなわち絶対的覆蔵態に他ならないのだが、同時にそれは個々の存在者があるがままに顕現せしめる〈開け〉であって、現象せる個々の存在者の形而上学的本体として、それらの根底に伏在し、あらゆるものを自らの内に摂収しつつ、同時にそれらを本然的にあるがままに開放するのである。換言すれば、現象せる個々の存在者は、どこまでも自らを顕現せしめた真如のうちに在り、逆に、個々のものの存在原因たる真如は、どこまでもそれらの本体として超越的に自己自身のうちに蔵身しつつ、同時に自ら顕現せしめたすべてのものの中に内在するのである。これこそ東洋的思惟に共通して見られる〈本体的一元論〉である。つまり言詮を絶する覆蔵的・超越的に一なる原理がその超越性をどこまでも維持しながら、自己内発的に自己展開し、万物の中に自らを内在化させていく論理、一なる本体とそれが起動

展開する派生態、つまり「体と用」（本体とその作用）の論理であり、「内在と超越」の論理であった。したがって、超越といっても、「外」に超越したものではなく、「内在的超越」という構造をもち、これこそ西洋的二元論の思考様式とは異なる「東洋的一元論」なのであって、いわゆる京都学派の哲学も、この系譜を引くものなのである。

Ⅱ ハイデガーにおける「神学の由来」と西田哲学に伏在する如来蔵思想

さて、以上のような形而上学的一元論の発想は、新プラトン主義の流出論ときわめて類似した考えであって、それはヘレニズム化したキリスト教、すなわち東方正教会の淵源となったものである。それにひきかえ、ラテン的西方教会は、むしろユダヤ・ヘブライ的二元論の伝統に立脚し、神はどこまでも「隠れたる神」であって、契約で結ばれた神と人間との間には深い断絶がある。他方、東方正教会の基本的特質は神の顕現（現前性）の強調と「人間の神化（テオーシス）」にあり、神と人間とは一つに結びついていて、これは「一切衆生、悉有仏性」を標榜する大乘仏教と通底している。

ところでハイデガーは、自らの「神学的由来」である「新約的」キリスト教の立場から、同じ西方でありながら新プラトン主義化したアウグスティヌスのキリスト教を論難し、延いては西洋の形而上学全体にわたってそれを「存在忘却」に基づく「存在－神－論」とみなし、その超克を企図したが、彼のいう「存在－神－論的体制」は、東方正教会にこそその最たるものがあるのであって、ハイデガー自身、存在を問うという極めてギリシア・ヘレニズム的な思考を展開させながら、存在そのものもつ覆蔵性に基づき形而上学を超克しようとする彼の思索の淵源には、ザラデルが指摘しているように、彼自身それに気付くことのなかったユダヤ・ヘブライ的発想が根深くあったように思われる。それは現前性の底に顕現せざる超越的他者を想定するという、非ギリシア的発想なのである。

一方、『起信論』が説く本覚思想を「現象即実在論」として哲学的に開陳したアカデミー哲学の本体的一元論の「形而上学」の系譜を引きながら、それを乗り越えるかたちで、同じくその如来蔵思想に見る「真如」のいわば覆蔵性もつ〈超越的他者性〉を「逆対応」という発想によって論理化しようとした点に西田哲学の優れた特質がある。西田とハイデガーとは、ともに「顕現せざるもの」への着眼によって形而上学を超克するところに共通点があるといえよう。